

第十一席 此機の儘では助からん

光明の
御養育

一 さて、昨日は阿彌陀さんの目的と衆生の目的と違ふ話をした。もう少し其事の話をする。事柄が分らんと話しても何んにもならぬ。遍照の光明の御養育に遇ふ事、今日はもう少し其話をする。

罪業は
彌陀に
任せよ

衆生の目的と彌陀の目的が違ふ、衆生の方は死んで佛、命終つて御淨土、彌陀の目的は命終つて御淨土へ連込むので無い、性根心地の確かなたつた今、墮ちん事の、參る事の助かる事にちやんと決めてやりたいと云ふ、それが南無阿彌陀佛の謂れ、御文さんにある、罪業は彌陀にまかせまゐらせて、墮ちる機が御助けにあつて引受けて貰つたからこつちは墮ちん機になつた。借金のあるのを向ふに引受けて貰ふ、其借金の無い機に轉じ變つた機の名前が正定聚の機。墮ちる機が引受けて貰ふ事が南無の二字。其機の事が雜行すて、彌陀たのむ、引受手に落着く事、受手に落着く事、そこで墮ちる機を彌陀に渡してしまふ、引受手に安心すること、受持つといふ親切に落着く事が彌陀たのむ。墮ちる機が御助けにあふ、それが南無の二字、南無となつた機を御助けが阿彌陀佛の四つの字の謂れ。南無となつた機を、よろこそ其機になつた、娑婆五十年は光明で守りづめに護つて貰ふ。此お助けは死んでゝない今。此六字の謂れをよく、心得るものを他力の大信心、これが平生業成の六字の信心の謂れ。今往生を手握りさせて貰ふ信心。一念を以ては往生治定の時刻を定め、それで何時でも大丈夫といふ安心が出て来る。つぎに阿彌陀佛といふ四の字は、南無とたのむ衆生を、阿彌陀佛のもらさずすくひたまふこゝろなり。——攝取不捨といふは念佛の行者を、彌陀如來の光明のなかにおさめとりて、すてたまはずといへるこゝろなり……。

南無阿彌陀佛の六字で平生業成の信心が決まる。向ふは見えんでも大丈夫、知

此機の儘では助からん

れんでも大丈夫、分らんでも大丈夫。何故、どこで片附いた、墮ちられん事になつた。それを平生業成と名を附けた。

へおなり
浄土
落ちる

二 墮ちるなりでお助け、すうつと御浄土へ、あかん、たのんですうつと御浄土へ、あかん、たのむのお土産持つて行くなら半自力、半他力。

命終らんたつた今、おちる機がお助けにあつて引受けて貰ふ、おちる機がおちん機に轉じかわつた事が南無、南無となつたから攝取、此意味は八十通の御化導を讀むとよく分る。そこで何時でも、一念を以て往生治定、どこできまつた、我機おさえて往生で無い、我機の方を眺めりや墮ちる機の品物がとられる、如來の方を眺めりや離れぬ、ごこを眺めても往生治定。

お前さんも、御助け間違ひない、と御浄土へ持つて行くから話が合はぬ。

墮ちん機になつてしまつて彌陀が離れぬ、離れんなら仕方無い、何時でも、二重になる事を知つて貰ひたい。一益でない二益。お前さん等前の益をのけて直に

お浄土
まで待
たぬ

御浄土の益に持つて行く、愚かな人は分りかねる人がある。それで衆生の目的と彌陀の目的と違ふ。衆生の目的は死んだら御浄土、命終つて佛、彌陀の目的は御浄土まで待たぬ、性根心地の確かなたつた今、墮ちん事の參る事の助かる事に今決めてやらうといふが彌陀の目的。決めてやらうが却々きまらぬ、それが平生業成になれん。安心出来ぬ、知らせて御呉れると落着けん、大丈夫となれぬ。南無と云ふ事が分らぬ。墮ちる機が御助けにあつて墮ちん機に轉じ變る事が分りかねる。安心出来ぬ、落着けぬ。幾ら聞いても此心がどうもなつて呉れぬ。困る／＼困るのは、南無を知らん、雜行する南無を知らぬ。墮ちん事になるのを南無と思ふ、受持つて貰ふ、引受けて貰ふ、受取つて貰ふのと反對ぢや。それで譯を知らんといかぬ。之は八十通の御文を讀むと決まつて居る。之のものは五帖目にあるか、

なにとる機の衆生をたすけ給ふぞ、又いかやうに彌陀をたのみ、いかやうに

此機の儘では助からん

心こころをもちてたすかるべきやらん。まづ機きをいへば十惡じゅうあく五逆ごぎやくの罪人ざいじんなりとも五障ごしょう三從さんじゆの女人にょにんなりとも、さらにその罪業ざいごふの深重じんじゆうに、こゝろをばかくべからず、たゞ他力たうりきの大信心だいじんしん一いつにて眞實しんじつの極樂往生ごくらくわうじゆうをとぐべきものなり……………。

チャンとぎまつて居る。

法藏菩薩の四

三 これはどういふ事か、御開山ごかいざんは法藏ほふざうの四選擇せんぎやくと云つて法藏菩薩ほふざうぼさつに選擇せんぎやくが四つある。それを一つちやめて三つにした。一つには機き、何たる機き、機きの選擇せんぎやく、正信ちやうしん偈げで「五劫思惟之攝受」と讀むだらう、五劫ごこつの間彌陀あまみだが考へた事こと、五劫ごこつの間選擇せんぎやく捨すて選えらび取とつた、其選擇攝取せんぎやくせつしゆ、一つには機きの選擇せんぎやく、吾々われの機きを選えらび取る、二番目にばんめには法ほふの選擇せんぎやく、機きを選えらび取とつて御淨土みじやうどへ參まゐらせる法ほふを考へて見る、三つには御淨土みじやうどの選擇せんぎやく、此極樂往生このごくらくわうじゆうはどうと云ふ事ことが出て來た。

一番初めは、衆生しゆじやうの目的もくてきと彌陀あまみだの目的もくてきとは違ふといふ事を話して行かんならぬ、此選擇このせんぎやくの話をする譯わけ。選擇せんぎやくといふ事は私わたくしが今言ふのでは無い、御開山ごかいざんが法

然ぜん様さまから御相傳ごさうでんの御聖教おしやうけうに選擇集せんぎやくしゆといふのがある。初めから終ひまで選擇せんぎやくと云ふ事ことの御化導おけだうをなさる。法然様ほふねんさまで一番大事いちばんだいじなのは選擇せんぎやく。

所ところが選えらび取とり選えらび捨すてるといふ事はどういふ事かといふと、之これは御文おみふみさんを讀むと分るが、斯しかういふ事ことがあらう。

諸佛しよぶつにすてられたるあさましき我等凡夫女人われららんがににんを、われひとり、すくはんといふ大願だいがんを、おこしたまひて、五劫ごこつがあひだこれを思惟しゆいし、永劫えうこつがあひだ、これを修行しゆぎやうして……………。

と書いてあらう。さうすると、諸佛しよぶつにすてられたる十惡じゅうあくの惡人あくにん、五障ごしょうの女人にょにんを助たすけたいが、阿彌陀あみださんの五劫思案ごこつしあんの初め。

四 諸佛方しよぶつがたには四弘誓願しよごうせいがんと云つて四つの願ねがひがある、諸佛しよぶつの通願つうがんと云つて、ごの佛ぼつでも佛ぼつになるには四つの御願おねがひをなさる。一つには一切衆生いっせしゆじやう濟度さいどし盡つくさにやおかかん之これが諸佛しよぶつの本願ほんがんの一番初め、二つには一切いっさいの煩惱ぼんごうを退治たいぢしつくさにやおか

諸佛は
皆四弘
誓願發

此機の儘では助からん

ん、三つには一切の法門を知りつくさしやおかん、四つには無上菩提を證らにやおかん。之を度斷知證の四弘誓願といふ。所が諸佛方だとして私を嫌ひだと初から逃げたのでない、ごこの佛も十惡の惡人五障の女人を助けたいは山々なれど困つた事がある。縁なき衆生は度し難い。此本山の門の前でお腹痛めて腰屈めて苦しんで居る。親類先か縁者の人ならば、御氣の毒な、ごうしたと云つて見てやらんなるまい、縁なきものは、之は仕様がな、縁なき衆生手懸りの無いものは助けらる事が出来ない。助けたいは山々だが、十惡の惡人、五障の女人は助け手懸りが無い、善根を積めよ、惡業をやめよ、それを手懸りとする、それは吾々には出来ません、と逃げた。そこで助けたいは山々なれども助け手懸りが無い、と仰しやる。吾々は夜晝なしに二十四時間の間、心の中の思ひの變る事は數へた事はないが八億四千遍變るといふ、其のチヨイ／＼變る思ひが皆欲しや憎やの思ひ、一つとして三途の業因ならぬものは無いといふ。所が今日は欲しい憎い可愛いは

一人一日
一億千念

一寸やめ、やめたらたまらぬ、やめたら死んだ方がまし。助けたいは山々なれど助けらる事が出来ぬ、善根積み、出来ません。惡をやめよ、出来ません、功德、そんな面倒な事は出来ません。助けたいは山々なれども手懸りが無いで仕方が無いと仰せられる。其諸佛に捨てられた十惡の惡人五障の女人、われ助けずんば又いづれの佛の助けたまふぞ、と踏み出したが五劫の思案。そこで一番初めに機を考へにやならぬ。いづれの諸佛が捨てられても、何か少しは手懸りになるものがあるぢやらう、と考へて居る間が五劫ぢや、長い事考へたものぢやな。所が五劫の思案の頂上が、とても凡夫の胸の中からは、佛にすべき手懸りは出て來ぬ。御淨土に生るべき手懸りは出て來ぬ、墮ちるより外は無いと決まつた。墮ちるより外には持たんものなら、墮ちる機のまゝで助けるより外に道が無い、と落着いた、機を選んだのぢやぞ、分るネ、こゝは難しい所ぢや、これから聽いて貰ひたい。

所が阿彌陀様は、墮ちる機を選び取つたが、墮ちる機の儘淨土に連れ込む事は

落ちのち
機は土に
浄土へ
参れぬ

出来ぬ。地獄の業因を以て御浄土に連れ込む事は如何に彌陀でも出来ぬ、町の人には分らぬが大根の種子を播いて茄子の芽は生えん。人蔘の種子を播いて蕪菁は生えん。如何に佛でも因縁因果の規則があるぢやによつて、地獄の業因で佛にする事は出来ぬ。けれども地獄の業因の墮ちる機の儘を助けやうより外に道が無い。阿彌陀様の永劫の御骨折りはこゝにある。こゝをやう聽分けて貰ひたい。

落しは
念力の
せんと
興へて
助ける

そこで阿彌陀様は、地獄行きぢごくぎの機きのまゝで助けやうより外ほかに道みちが無いと選えらび取とつたは選えらび取とつたなれども、地獄行きぢごくぎの機きのまゝで連れ込む事は出来ぬ。そこで阿彌陀さんが永劫えうこくの修行しゆぎやうで萬善萬行まんぜんまんぎやう恒沙こくさくの功德こくどくを成就じゆじゆと、仕し上げて、其その萬善まんぜん萬行まんぎやう恒沙こくさくの功德こくどくを以もつて、墮おちる機きをたつた今受取いまうけとつて墮おしはせんの念力を與へて、墮おちん正定聚しやうぢやうじゆの機き、南無なんぶの機きに今仕立いまじだて上げて、娑婆しやば五十年ごじゅうねんは守まもりづめに護まもる、それが南無なんぶと云いふ事こと。

お前まへさん御文おんぶんさんの五帖目ごてふめ、信心獲得しんじんかくとくの御文おんぶんさんを讀よんで見みい。

功德成就
業消滅

信心獲得しんじんかくとくすといふは、第十八だいじゅうはちの願ねんをこゝろうるなり。此願このねんをこゝろうるといふは、南無阿彌陀佛なんぶあみだぶつのすがたをこゝろうるなり。このゆゑに南無なんぶと歸命きみやうする一念ねんの處ところに發願はつねん廻向くわうのこゝろあるべし。これすなはち、彌陀如來みだにょらいの、凡夫ぼんぷに廻向くわうしますますこゝろなり。これを大經だいぎやうには令諸衆生れうしよしゆじゆ功德成就こくどくじゆじゆとどけり。

永劫えうこくの修行しゆぎやうの一番終いちばんしまひは功德こくどくを成就じゆじゆして衆生しゆじゆに與あたへる。

されば無始むし已來いらいつくりとつくる惡業煩惱あくごんぼんなんを、のこるどころもなく、願力ねんりき不思議ふしぎ議ぎをもて、消滅せうめつするいはれあるがゆゑに、正定聚しやうぢやうじゆのくらゐに住すますとなり。これによりて煩惱ぼんなんを斷たんぜずして涅槃ねはんをうといへるはこのこゝろなり。

阿彌陀あみださんが墮おちる機きのまゝ助たすける事ことは出来できない。そこで墮おちる機きをたつた今いま、永劫えうこくの修行しゆぎやうの萬善萬行まんぜんまんぎやうを資本もとをもつて受取うけとる。其受取そのうけとつて下くださる勅命しよくめいが、まかせよ。我われにまかせよと喚よんで下くださる。墮おちる機きを彌陀みだが今受取いまうけとつて墮おちん機きにして下くださる。墮おちる機きの因いんを以もつては佛ぼつになれんぞ。

此機の儘では助からん

そこで彌陀が永劫修行のもとでを以て、墮ちる機をたつた今彌陀が受取つて、墮しはせんといふ親の念力を與へて、墮ちん機、南無の機に仕立て上げて、俺が娑婆五十年守りづめに護る。半分ばかり分つたやうな、有難い事だ。

向ふは見えん
見てもよ

六 今墮ちる機を彌陀に渡して、墮としはせん念力を貰ふ、雜行棄て、彌陀がたのまれました。おまけに攝取の光明で護つて離れん、向ふは見えんでもよい、知れんでもよい、分らんでもよい。どうなる。何ん時でも無常の風は来い〜。

死にたい事はなけれど、身は此世の置土産、魂だけは何ん時でも、平生業成と云ふ事。今御助けにあづかつた事の嬉しや、御助けにありつる後なれば、此念佛をば佛恩報謝の念佛。平生業成だから臨終待つ事なし、寝ながら息が絶えやうと、一夜の中に命が終つても、命のきれ場が彌陀同體、それでなげりや喜べやせぬ。

これが反對になる。聞こえたら墮ちん事になるぢやらう。貰へたら大丈夫になるだらう、心にきいて見る、大丈夫になれんから、まだ貰へん〜と始めるわ。

心の展
覽會

お前さん等一返みんな心の展覧會をやつたら面白からう、難しいのだ。之は一重でない、二重になる。一重にやるからいかん、今御助けにあづかつたから何ん時でも……それを今御助けにあづかる方はやめて置いて、何ん時でもとならうと思ふ。聞いても〜聴聞しても〜はつきりならん、まだ貰へぬ〜、南無の方はさうでない。どう聞いても〜聴聞しても、私ばかりは此心がなほつて呉れません、聴こえたら頂げやう、貰へたら此機がよいといふだらう、なること一つに心配した、どうしてもなれません。どうしよう、それでよし〜。何故かといふと受持つのぢやもの。なつた方なら受持つ事は要らん、なれんから親が受持つ、親にまかせよ、墮ちる機を俺が引受ける、參れん機を俺が引受ける、そこをやりそこなふ、安心しました落着きました、夜明けしました、すつかりなりたい、ならねばお助けに遇へぬやうに思ふ。なつたら阿彌陀さんは要らぬ。みんな獨りで行き相な顔をしどるわ。やう聞きそこなふなよ。

此機の儘では助からん

落ちたる
機を自ら
分る始
末すな

苦し
み
を
取
る
御
助

七 南無と云ふは墮ちる機をたつた今彌陀が受持つ、墮としはせんと云ふ念力を與へる、そこを聞かんものだから、墮ちる機を受取つて貰ふ事を知らん、墮ちる機を自分で始末つける。聞こえたらどうかなるだらう、頂けたらどうかなるだらう、貰へたらどうかなるだらう、みんなそんな顔付だ、二十年も三十年も聞いて、何で貰へんのだらう、聞こえんのだらう。そんな事なら千年聞いてもあかんのぢや。阿彌陀さん、どう聞いてもあきません、どうかなる、ならうと何んぼう氣張つてもあかん、聞いた時は御尤も、あとから何んにもあとかたもなし、參れ相にない、つかまへ所が無い、どうしませう。それでよし。どうかや、これでもいかなか。墮ちる機をたつた今彌陀が受取り墮としはせんの念力を與へて墮ちん機に仕立てあげる、どうして下さるといふたら、墮ちると知つたら、そこを抱へて泣くのぢやない。參れんと分つたらそこをおさへて泣くのぢやない。受持つ親が待ちかねて居るで、我にまかせよ。墮ちる機御助けとは斯う行くのぢや。

御助けとは受持つこと、引受ける事、受取る事、御淨土へ參らせて貰ふ御助けと違ふ。どうして下さる。墮ちんの世話は此彌陀がする、參るの世話は此彌陀がする、墮ちる墮ちん、往ける往けるの世話だけは、此彌陀が受持つ程に、そつちやの心配は要らん、墮ちる機引受ける所ぢや。然らばどうしよう。どうなる事も要らんぞよ。生れついたりる生地のまま、ありべがりの其まゝで墮ちる實機の儘で、受取るもどでが永劫のもどぢや「これを大經には令諸衆生功德成就とてけり、されば無始已來つくりとつくる悪業煩惱を、のころどころもなく、願力不思議をもて、消滅する」、「三世の業障一時につみきえて、正定聚のくらゐ、また等正覺のくらゐなんどにさだまるものなり」。然らば、こゝはどうなりませう。どうする事も要らん、往ける往ける、參る參れんは俺が受持つ、墮ちんの世話も俺が受持つ、參るの世話も俺が引受ける。そつちや向かんと置け。私はどうしませう。それからさきは此彌陀が受持つてやる。たゞ受持つといふのぢや無い。受

辨
せ
る

此機の儘では助からん

持つて貰ひやうは、我よく汝を護らん、俺が守りづめに護つて離れはせん程に、姿も見えず、光明も見えんでは、そなたは落着くまいで、第十八本願の約束ばかりではいかんから、六方恒沙の諸佛が證據人、萬が一つも墮ちたら、そなたばかりはやりやせんで、此彌陀もともに焰の中迄も離れん約束が若く不生者、正覺の命懸けでも俺が受持つ、そこであなたの方の心の落着場据はり場は、俺が護つて離れはせんで、墮いたらそなた一人はやりやせんで、此彌陀も共に焰の中迄も離れはせんで、そなたの心の落着は、地獄極樂はやめにして、離れん親をば當にするばつかり、受持手の親を力にするばつかり。離れんといふ親切に得心をする、我をたのめよ。

そこで南無といふは衆生が雜行すて、彌陀たのむ。悪いやつは向ふにやつて、引受けるといふ親切にちやんと安心する。それが南無といふ事になつた。墮ちる機が御助けにあつて墮ちん機に轉じ變る所。